



所属チーム／九州ドルフィン・SEA WEST バスケットボールクラブ
出身地／長崎県 年齢／19才 持ち点／2.5

11

江口 侑里

EGUCHI Yuri

「難しいからこそ楽しい」車いすバスケット

江口 侑里(2.5)

<健全バスケットとは違うコート上の雰囲気を感じる魅力>

今年3月に高校を卒業したばかりの18歳、江口侑里。

車いすバスケットボールを始めてまだ2年未満の江口だが、実は“バスケット歴”は長い。

小学3年の時にミニバスケットボールを始め、中学、高校とバスケットボール部の部員としてプレーし続けてきた。

車いすバスケットを始めたのは、昨年1月。通っていたリハビリセンターのスタッフのすすめで見学に行った際にチームに誘われ、健全のバスケットと並行してやり始めた。そして高校最後の大会を終えた後は、車いすバスケットに専念している。

2つの“バスケット”を知る江口にとって、車いすバスケット特有の良さを感じるのはコート上の雰囲気だ。

「車いすバスケットでは、どうしても死角ができてしまうので、試合中ずっと“トーク”し続ける。

それは健全バスケットにはないところで、自分はそういうところがいいなあと思うんです」

実はもともと車いすバスケットには興味があったという。しかし、「完全に歩いたり走ったりすることができない人たちしかできないスポーツ」で、手足に片麻痺があってもランニングバスケットができる自分はできないものだと思っていた。

だから車いすバスケットができる今、江口は楽しくて仕方ない。

まだランニングバスケットよりも難しさを感じていると言うが、試合での彼女のプレーはいきいきしている。

<期待膨らむポイントゲッターとしての役割>

バスケット部ではセンターのポジションを務めていた江口は、ランニングバスケットでの1対1を抜く技術を有する。だが、車いすバスケットでは、そう簡単にはいかない。バスケット車が幅をとる分、抜く“隙”がないことが多く、そのためにピック&ロールなど、チームメイトとの連携によるプレーが多い。江口にすれば、その車いすバスケット独特の難しさこそが、面白く感じられている。

経験は浅いが、江口の存在はチームにとっては不可欠であることは間違いない。

持ち点2.5とローポインターでありながら、高さがあり、さらにバスケット経験者という利点もある。

江口自身は、自らの役割をどう感じているのか。

「自分は高さがある方で、どんどんシュートを狙ってほしい、ということはいく言われるので、練習でもシュートを重点的にやるようにしています。世界選手権でも、いかにシュートが打てる位置に入れるかだと思っています」

江口がハイポインター並みのシューターとして活躍することが、日本の勝利の可能性を一気に上げるカギとなる。

一方、最大の課題とするのは車いす操作だ。車いすを漕ぐ“一歩目”のプッシュが弱く、攻守の切り替えで相手のバックピックなどにかかってしまうことも少なくない。今、その強化に余念がない。

車いすバスケットを始めてわずか1年で代表候補に抜擢され、そして12人のメンバー入りを果たした江口。「最初は本当に自分でいいのだろうか」と思っていたというが、今は「選ばれた以上は頑張りたい」と意気込みは十分だ。